谷川内閣府副大臣（金融担当）就任インタビュー



谷川　とむ（たにがわ　とむ）

生年月日	昭和51年4月27日
出身地	兵庫県
選挙区	大阪府第19区
趣味	映画鑑賞

※略歴詳細：官邸ウェブサイト

第２次高市改造内閣の発足に伴い、本年９月18日に就任した谷川とむ内閣府副大臣（金融担当）に、意気込みや日頃の活動等について伺いました。

ーはじめに、内閣府副大臣（金融担当）に就任した意気込みについてお聞かせください。

このたび内閣府副大臣として、金融、経済財政政策、日本成長戦略など、我が国の経済成長と国民生活の向上に関わる幅広い分野を担当することとなり、身の引き締まる思いです。

また、私がこれまで推進してきた「責任ある積極財政」の実現に政府の一員として携わる機会をいただいたことを大変ありがたく思うとともに、その責任の重さを改めて感じています。

官民連携による国内投資を促進し、経済を成長させ、企業収益や賃金の向上につなげる。そして、消費拡大やさらなる投資を生み出していく。そうした成長と分配の好循環を実現していくためには金融の力が不可欠です。

金融機関や関係者の皆様には、成長分野や新たな挑戦に取り組む企業への資金供給を通じて、日本経済を支えていただきたいと考えています。金融は体で例えると血液のようなものであり、資金が円滑に循環することで経済全体が活性化します。特に、日本が持続的に成長していくためには、地域の活力が欠かせません。そのために、地域金融機関の皆様にも地域経済を支える重要な役割を担っていただきたいと考えています。金融の力を総合的に活用し、日本全体の成長につなげていきたいと考えています。

同時に、金融システムの安定性確保や利用者保護も極めて重要です。金融を取り巻く環境整備を進めるとともに、国民の皆様に理解を深めていただけるよう努めてまいります。

ー国会議員を目指すこととなったきっかけについてお聞かせください。

私の実家はお寺で、幼い頃から僧侶に囲まれた環境の中、４人兄弟の一番下の子供として育ちました。父は国会議員、兄は市議会議員をしていたため、周囲からは「谷川先生の息子さん」、「谷川先生の弟さん」と見られることが多く、自分自身のアイデンティティや個性を発揮する機会があまり多くなかったように思います。そのため、家族の名前ではなく、自分自身の力で何かに挑戦し、自分にできることを見つけたいという気持ちを強く持っていました。

16歳でイギリスに留学し、その後アメリカでの経験も経て、帰国後は俳優を志しました。大学に通いながらオーディションを受け、舞台『The Winds of God』や映画『ラスト サムライ』への出演を果たすなど、俳優として着実に経験を積み始めていました。しかしその後、父からの反対を受け、俳優活動を辞めることとなりました。

そのような時に、郵政解散があり、地元である大阪19区の皆さんから政治の道へのお誘いを受け、大阪19区や大阪府連から衆議院選挙の候補者として推薦していただきました。その時は、最終的に党本部の判断で公認をいただくことができませんでしたが、地元の皆さんが「無所属でも出馬してほしい」「私たちが支えるから一緒に戦おう」と声をかけてくださったのです。

正直、私は当時まだ27、8歳で、政治というものを十分に分かっていませんでした。しかしこの時、地元の会合で数回しか会ったことのない方が、私を応援してくださり、真剣に地元泉州や大阪の将来を考えている姿を目の当たりにし、胸が熱くなりました。結局、無所属での出馬は見送りましたが、「次に機会をいただけるのであれば、応援してくれる皆さんのため、泉州・大阪や日本のために一生懸命働こう」と強く決意しました。

私が政治家を志した原点は、まさにその時の経験にありますし、今でも政治家としての原動力は、そのとき抱いた責任感と感謝の気持ちにあります。

選挙後、両親の計らいもあり、父の秘書として約７年間働きました。その間に、政治を志すのであればきちんと学ばなければならないと考え、大学院に進学して法律や政策について学びました。何とか秘書業と両立しながら大学院を修了（法学修士）し、父に政治家になりたいと伝えたところ、「お前は最初の選挙で政治家になれなかったのだから、もう政治家としての道はない」と厳しい言葉が返ってきたのです。私はこれまでの努力を否定された気持ちになり、落ち込みました。

しかし、地元組織の体制変更や、かつて私を支えてくださった皆さんによる助力もあり、最終的に選挙に挑戦する機会を得ました。最初の選挙では敗れましたが、その時にこれまで政治家の道を認めてもらえなかった父から初めて「頑張れ」と激励と労いの言葉を貰い、心から嬉しい気持ちになりました。そして２回目の選挙で当選し、初めて国会議員になりました。



写真：インタビューを受ける
谷川副大臣

―国会議員になるまで様々な苦労があったのですね。

後援会も地盤もなく、親戚や知人もほとんどいない選挙区だったため、地元の皆さんと一緒に、一つ一つ手探りで組織づくりを進めてきました。

そうした活動を続ける中で、私は選挙区を隅々まで歩き、多くの方々から直接お話を伺ってきました。その中で強く感じたのは、地域経済を支えている中小企業や小規模事業者の皆さんが直面している厳しい現実です。

私の選挙区は大阪府の泉州地域で、かつてはタオル産業やたまねぎ栽培などで発展してきた歴史を持つ一方、今ではかつての勢いを失ってしまった部分があります。豊かなポテンシャルを持つ地域でありながら、その魅力や強みを十分に活かしきれていないという思いがあります。

私は、こうした地域の力をさらに引き出していくためには、個々の事業者や住民の努力だけに任せるのではなく、人材や企業が集まる環境をつくり、必要に応じて行政も投資や支援を行っていくことが重要だと考えるようになりました。

投資を促し、新たな産業を育て、地域の活力につながる取り組みを進めていきたい。その思いが、私が政治を目指した大きな原点の一つだと思っています。

―これまで国会議員として取り組まれてきた中で、一番印象深かったことは何ですか。

様々な出来事がありますが、最も印象に残っているのは、「責任ある積極財政」という考え方を政策の中心に押し上げることができたことです。

私は４年前に仲間の議員とともに「責任ある積極財政を推進する議員連盟」を立ち上げ、共同代表を務めてきました。当時のメンバーは若手議員が中心で、党内では必ずしも主流の考え方ではありませんでした。経済成長のために必要な投資を訴えても、「財政規律をどうするのか」といった厳しい意見を受けることも多く、時には理解を得ることが難しい場面もありました。

それでも私たちは、経済成長なくして税収増はなく、日本の将来を考えれば今こそ必要な投資を行うべきだという信念のもと、経済政策について提言を続けてきました。

当初は少数派として見られていた考え方でしたが、粘り強く訴え続けた結果、現在では政権運営の中核的な考え方の一つとして位置付けられるようになりました。私たちが長年取り組んできた考え方が国の政策の中心に据えられたことには、大変感慨深いものがあります。

もちろん、それはゴールではなく、大切なのは政策の成果を実際に国民の皆さんの暮らしや地域経済の発展につなげることです。その意味では、大きな責任も感じています。これまで積み重ねてきた政策を、しっかりと結果としてお返ししていかなければならないと思っています。

また、政策面で特に印象に残っているものとして、共同親権制度に関する法整備があります。私自身の経験もあり、この問題には強い思いを持って取り組んできました。様々な立場の方々との議論や調整を重ね、法務省や関係議員の皆さんとともに制度改正への道筋をつくることができました。

ただ、この問題についても、法律が成立したことで終わりではなく、実際に困っている方々を減らしていかなければなりません。まだ改善すべき課題は多く残されており、今後も取り組みを続けていきたいと考えています。

さらに、総務大臣政務官を拝命している時に、携帯電話料金の引下げに向けた政策に携わる機会もいただきました。

このように多くの国民の皆さんの生活に直接関わる一つ一つの政策に関与できたことは、大変ありがたく思っています。

―普段本当にお忙しくされていることと存じますが、時間があるときにはどのようにしてリフレッシュをされていますか。

国会議員は365日ほとんど休みがありませんが、飛行機や新幹線での移動中に、映画やドラマを観るようにしています。例えば、諜報機関やスパイを題材にした作品、金融や政治をテーマにした作品を観ることが多いのですが、その時間だけは仕事から少し距離を置いて作品の世界に入り込むことができるので、いい気分転換になっています。

また、私は３人の子どもがいますが、仕事の合間に一緒にイベントへ出かけたり、食事に行ったりしています。短い時間ではありますが、家族と過ごすひとときは大切な息抜きになっています。

以上

（インタビュアー：広報室長　小澤　裕史）



写真：インタビューの様子